

## 随想 三想 ヴォーグの秘密

橋 昭三  
△デザイナー▽



外科展というのをやった。

森本洋子氏との2人展。

元町・海文堂のギャラリイで晩秋の一週間、随分沢山の方が見に来てくれた。作品の3分の2ほど売れたから、かなりいい評価をいただいたと嬉しがっている。ところで、*「外科ってなんや」*という質問多数。森本氏はステンドグラス、わたしはキリ紙。素材こそ違えキッタ、ハッタ、ヌッタ、の世界。つまり外科。純粹絵画に対する少し負目もあるにはあつてのゆえか。

妙を得たタイトルと一人喜んだ次第。個展(まだ僅回だが)を開くと、いつものことだが、見に来てくれる人たちの中で、かなりの人は、必ずといってよいほどわたしの作品を凝視する。*「何をつかって画くんやろう?」*彼らの顔はいつも問いたげである。油彩でもない、水彩でもない、クレパスでもない。ましてエンピツでもない。アレでもないコレでもない。カラージュ彩色である。つまり「色」。一口でいえば、わたしの絵

具は色の紙。そう、あの図画工作の時お世話になる色紙。千代紙もありますね。その色紙をちぎって貼ったのが貼り絵、ちぎり絵、昔からある手法です。わたしは、この色紙をカッターで、巾1ミリ、いや0・5ミリに切る。それをデッサンした下絵に従って貼り合わせてゆく。手始めはこれをやった。しかし、色紙の色数として限度がある。第一、濃淡が出ない、微妙な色遣いは望むべくもない。所詮人様のマネごとか、これでは



▶ヴォーグの秘密が見破られますか?

勝てない。色気求めて暗中模索、思考錯誤……色の道は極めて奥が深く、一生かかってもたどり着けないという。自分の色をどうやって出すか、おおよそモノツクリに携わった人ならば一度ならずとも苦悩するという。

ある日、外国のファッション誌をめぐっていた。その名は Vogue。ヴォーグ。

世界のモード誌の頂点に立つ本だ。フランス色というのだろう。色遣いがとにかく美しい。ちよと求めていた紫色、思わず知らずカッターがすべった。やっただぜ!以来、ヴォーグは、わたしの絵の具。他の色紙はいっさい使わない。細身の活字も、わたしのテーマ(神戸・船と女)に合った。一切合切ヴォーグまかなう。つまり絵の具は色の紙、筆はカッターとのり。あとは10本の指と20年の職人、いわせてもらえば、デリケートなセンスである。

皆さん、もし、機会があつたら、わたしの作品を、ちよと時間をかけて見つけてください。あなたには、ヴォーグの秘密が見破られますか?

蛇と女と川柳

助川 助六  
〔川柳作家〕



巳は蛇(へみ)の省略だという。曆法では、十二宮の巳に蛇を充てていて、今年の眼の正月は蛇である。眼の保養にしては、頗る恐い女性と出逢いそうな気がする。

蛇が細長い舌を出し入れするのは、においをかくためだという。私は「いい年をして男ぐさい」と愚弄されるが、蛇女なら私の刺戟を容れてくれるかも知れない。

女の情というものは執念深くて蛇より怖いといわれるが、昨今は男のほうが執念ぶかい。とくに年寄りのさかうらみは、火を降らせるようなものである。しかし、神話をはじめ昔ばなしなどの蛇の伝承には、ものの哀れさを感じる。

仲のいい蛇が夜明けを眩しがる標句のように美の極致が蛇性と化しても、女の根性は蛇の下地とか、手をつけられないのが怪気からくる執念である。

拒んで許すは女心などと自惚れて深追いをし、向こうズネを蹴つとばされたという話をきいた。相手が嫉妬に狂う蛇女でなかったのが幸いであった。私はというと、



かなしみは男へも頒け餅を焼くの心情にコロリといかされる。いい女とは強くも逞しくもないのである。私は新春を迎えるたびに、血や肉で感じる情の濃さを、川柳に転化したいと念じる。そしてアウトサイダーの不利な立場を慨嘆するのである。だが何といっても川柳が大好き、それも女の側からうたうことで、女の衝動性を見極めようとする。助六の五臓六腑に女が取り憑いているという弥次馬

の口合いにも拘泥しない。ゆえに人妻に戻ってからも余波を抱くと、不貞な心奥を覗いてしまう。つまるところ、私も蛇の性に該当しそうだが、実は私は丑どし。蛇は生まれながらにして牛を呑む気があるという。やっぱり蛇につながる女は気味悪い。そこで、

玉串に雉ぎ被われる乳房かなと、心にもなくいたわってみたくなる。男の裏を見ていて空惚ける女性は、ひよっとするとひよっとしそうな蛇を抱えている悪女かもしれない。私はそんな知的悪女に魅かれるが、どうやら自戒せねばならなくなった。しかしながら、  
 ぶどう酒の甘さ魔性をあふれさせ

す  
 の情景に触れると、どうでもいいやの心境になってしまう。女性にモテる男は、女で苦労し、女の弱味を知りすぎるほど知っている男だということである。私はそれに及第しない。川柳のほうへと心を傾ける一因なのであろう。

書初めの思いに添うていく乳房

## 随想 三題 神戸に賀川通を

武田 芳一  
▲作家



私がなぜ賀川豊彦に固執するかは、賀川は神戸生れであり、世界的に有名なことは、何も宣教師だけのことではない。他にも大きい功労を日本にも世界にも行なっている。賀川の秘められた歴史で、日本にも大きな歴史がある。この事件は日本人は忘れてならない歴史である。それを実証する資料はどこにもないが、私は自分の命をかけても、これは本当の事件だと信じている。だから、これは日本の国家と民族がある限り、否定してはならないものだ、私は確信している。

昭和十五年、日本軍が中国の首都南京を陥した時、一番乗りの手柄の兵隊は、逃げおくれで隠れていた住民を多く虐殺した。それを東京にいた賀川は知って神々に祈った。「父よ！彼らをお許し下さい。彼らは自分のしていることが分らないのです。私たちクリスチャンは、どんな辱めと、国賊と罵られようとも、この軍国主義に負担してはいけません。私たちは無抵抗主義で、一日も早く、この世

界が平和になりますようにお祈りいたします。アーメン」と祈った。

昭和十五年は米英との戦端はまだなかった。送還される米人宣教師は、彼の祈りを持ちかえり教会誌に発表した。その一枚が謀者から日本へ知らされた。賀川はすぐ渋谷の憲兵隊に拘引された。それが米大使によって、重慶の蔣介石にも知らされた。彼はそれを読んで、「日本にドクター、カガワのような人がいる限り、私は日本と



ロサンゼルスのカガワストリート

の平和の望みはすてません」といった。日本の首相は「蔣介石は相手にせず」といった。どちらが正しかったかは読者の判断にまかせ。日本がポツダム宣言を受諾して、敗北が決定した時、蔣介石夫人の宋美齡女史は、「私は、日本人を亡くして下さいと祈れませんでした。それは、日本には中国人のために、我が身をすてる覚悟で、涙の祈りをしてくれた、ドクター、カガワが日本にいるからです」この放送は、北京の教会の牧師だった小川牧師が、帰国した時、賀川に告げた。ヤルタ会議（ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三者会議）でスターリンは三十八度線から北（仙台から北）は我方へと、日本を朝鮮のように分轄を主張した。蔣介石は分断統治はカガワのいる日本がなくなってしまうと、会議内容を報告する米大使にいった。米大使はそれを打電した。その結果が今日の日本になれたのではない。ロサンゼルスにはカガワストリートがある。神戸にも賀川通を作ること、神戸人は誇りとすべきだと私は思う。



△その山▽

## 鞆の浦に想う

### — 歴史民族資料館を観て

米花 稔△神戸大学名誉教授・福山大学教授▽

新春を迎えて街を歩くとまず聞えてくるのが箏曲「春の海」のメロディ。ことしは時節柄すこしすくなかったが、その作曲者宮城道雄さんは、一八九四年(明治二十七年)神戸の三宮居留地五八番館の出生

というところで神戸に縁がある。この曲は宮城さん三五歳、両親のふるさと福山の鞆の浦で、海辺の空気にふれて、かねて愛好せられていたドビュシー作曲「海」の刺戟のもとに、作曲せられたと伝えられる。毎週神戸から福山大学に通っている筆者には不思議な出会いに思えてくる。ちなみに日本の琴の生産の七割は福山が占めている。

その鞆の浦の城跡に、昨年春市立鞆の浦歴史民俗資料館ができた。勿論宮城道雄特設コーナーも設けてあるが、ここでは鞆という地域をおして日本の歴史の歩みをかいま見せてくれて興味深い。鞆の浦は、瀬戸内海でも古来潮待ち風待ちの要所のひとつとしての港であったことから、日本の歴史の代り目には常に登

場してきたまちであることが、このささやかながらの展示を通じて教えてくれるのである。

古く大伴旅人が九州太宰府から都への帰途この浦の「室の木(ムロノキ)を見て亡き妻を悲んで歌い、遣新羅使もこの舟路で歌うなど萬葉に残されている。源氏に追われた平家もこの道逃げた。展示には「足利は鞆に興り鞆に滅ぶ」とある。尊氏が北朝の院宣をうけたのが鞆の小松寺といわれ、信長に追われた義昭は毛利を頼ってここに館をおいた。江戸時代になると政治中心は福山に移るが、鞆は西廻航路の中心となり、北前船も往来し、商業活動が盛んとな

る。また二〇〇年間に二回の絵巻物でも知られる朝鮮通信使往來の宿泊もこの地であった。幕末には三條実美ら七卿落ちもこの浦の中村家宿泊の遺跡は今も残る。歴史の展示はこの辺りまでであるが、

いま坂本龍馬のいろは丸がこの沖に沈んでいる等というので、地元有志はその引揚の夢を今年の実現にかけている。そしていきなり現代、芦田川をこえて臨海部で東洋一を誇る日本鋼管福山製鉄所はかつての程の勢いはないが、二世紀を前に、次世代製鉄法といわれる溶融還元法の本格実験をはじめている。世の動きは、常に地域に具現する等であるが、地域によってとりわけ顕著にそのことを示す。鞆の浦はその適例のひとつといえよう。

資料館を訪ねた足で、かつて朝鮮通信史が座して眺めたはずの、福禪寺対潮楼の東向き座敷から、備讃瀬戸の山なみをみる。太陽と月が季節によって対照的に昇る位置的情况から、ここは単なる景勝の美をこえて、曆なり季節を正しく指示する科学的役割を果たしたのでないかと任職の話は熱っぽい。

しばし想いを走らせて、古えから現代までを辿りつつ、ひととき地域というものの意味を考えさせられたことであつた。



▲対潮楼からの風景

▼福山市鞆の浦歴史民俗資料館

Asahi  
LIVE ASAHI FOR LIVE PEOPLE

この味が、  
ビールの流れを変えた。



飲むほどに  
辛口。生。  
DRY

「DRY」  
ASAHI BEER

アサヒスーパードライ

アサヒビール株式会社

〈サッポロドラフト〉  
うまくなった生の  
新しい呼び名です。



SAPPORO  
DRAFT

サッポロ生ビール

●未成年者の飲酒は法律でかたく禁じられています。



# 馴れに期待して

三枝和子(作家)え・元永定正

お正月のテレビで、海外の話題を提供するコーナーがあって、ぼんやり眺めていたら、サウジ・アラビアだったか、何でもイスラム教圏の国でのサッカーの試合が映像に出て来た。試合そのものの紹介ではなく、イスラム教のタブーについて、いろいろ説明している例の一つであった。

「競技場に女性が入場することは許されませんので、男性ばかりの観戦です」と言っている。

なるほど、スタンドの観客は全員男性。しかしかなり異様な光景だった。私たちがいつも見馴れているスタンドは、男女ごちゃ混ぜの応援ばかりだったせいかもしれないが、妙に落ちつかない。ここでフェミニズム云々を言いたてるつもりはないが、馴れというものは、つくづくおそろしいと思う。サウジ・アラビアの人たちは何の不思議もなく受けとめている事柄なのだろうけれど。

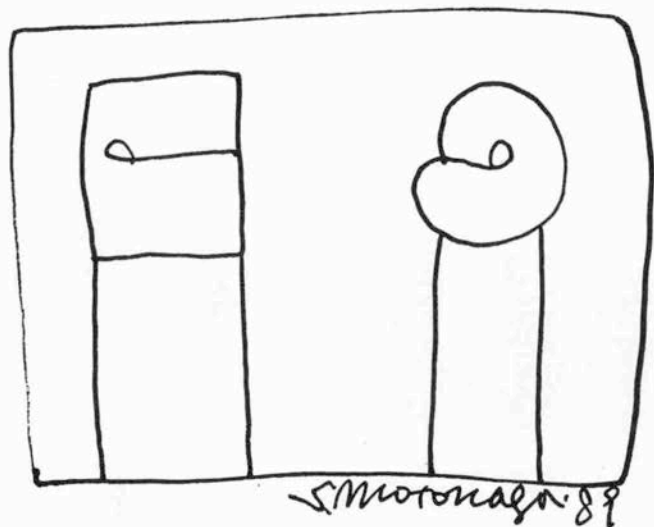
そう言えば、社会党の土井たか子委員長が就任を決意した言葉のなかに「女性の党首が存在するのだということ、テレビなどのメディアを通して子供たちの意識のなかに植えつけることができれば、と思う」という意味の発言があった。子供たちばかりではない。私たち女性も、そして女性党首の出現を苦々しく考えているガンメイコロウ

な一部?(いや、大部分カナ)の男性諸氏も、何となく馴らされて来た。これが大事だ。

イギリスの女王陛下だってそうだ。あの国に、王冠をかぶった女性がいることで、どれだけ世界の女性が、ほっとしていることだろう。これが日本みたいに「男系ノ男子、コレヲ継承ス」で全部男の王様ばかりだったら、人間の女は一国の君主として立つものではない、ということ、女性の地位は一段と低い存在になってしまう。辺境の小さな部族に残っている習慣ではなく、レッキとした文明大国に女王陛下がいるということ、他の国の女性たちは、自分の国は例外か、あるいはオクレテイルのだと、自分自身を慰めることができるのである。

一方、日本の男性の口からよく聞くセリフだけれど「たてまえはどうあれ、日本は実質的には女が力を持っていますよ」という見方がある。その例としてヨーロッパなどでは、いまでも男が財布を握っていることがあげられる。でも、実質的に力を持つことと、男尊女卑の思想があることは別の問題ではないか、と私などは思うのである。

すでにあちこちに書き散らしているのですが、私古代社会研究のため、ギリシアのアテネに家を借



りていることはご存知の方もあると思うが、その大家さん夫婦を見てみると、財布はやはり旦那が握っている。奥さんは、その折々、日常生活のための小銭を旦那からもらって暮している。しかしそのことで奥さんが卑屈になっているとは思えない。単に、お金を直接もってきて来る人がそれを持っている、みたいなのだ。したがって共働きの夫婦などは、それぞれのお金をキープしているのだから旦那は宝石だとか、毛皮だとか、財産になるものをプレゼントしなければならぬ。

それよりも驚くのは、あちらの男性が実にまめまめしいということだ。日本でいわゆる祖大ゴミ

的な存在が居ない。くだんの大家さんは、そろそろ六十も半ばを超えろという年輩だけれども、下着なんか、ちゃんと自分で洗っている。食事の用意以外のときは、コーヒーは自分でいれて、奥さんにもサービスしている。ギリシャ・ブズーキ弾きのグループの大ボスだけれども、家庭生活においては、決して尊大な様子は見えない。縦のものを横にしないで寝ころがって、新聞！ 煙草！ 灰皿！ と他人、特に女房をアゴの先で使うという気配は全くない。個人的に女房をこき使って平気、という感覚がない。その点では、個が確立されている上での男性優位社会である。したがってヨーロッパでの、この男性優位社会は、男尊女卑の思想にはつながらないのではないかと思う。この違いが大事だ。

ヨーロッパでの男性優位社会は、役割分担、男は外仕事、女は内仕事という役割分担が生んだものであるが、日本の場合、その上に、女は劣っているから社会的仕事はさせられないという思想が加わっている。この啓蒙が大変だ。

つい先だって、あるPR誌に「男はバカで可愛い」というテーマでエッセイを書いたら、「バカ」という差別語はどうかと思う、というクレームがついて、原稿料を払ってくれてポツになった。「ヘエー」とびっくりしてしまった。もしも「女はバカで可愛い」というテーマなら、決してポツにならないだろうと思うと、何となく釈然としない。しかし、これだって、女たちが総出で、「男はバカで可愛い」というムードを定着させれば、馴れで、いつしか「女はバカで可愛い」と同じくらしい市民権を得るかもしれないのだ。



□トランペット片手にブラジル一人歩きへ17

## リオ・ヨットクラブの

## ジャズの夕べ。

絵と文

右近 雅夫 へ在ブラジル・サンパウロ

「おう、アミーゴ、ポタフオーゴ海岸のリオ・ヨット・クラブ迄行っておくれ」。サントス・ドウモント空港でタクシーをつかむとフェルナンドが運転手に言った。僕等に乗せた車は、たそがれのフラメンゴの海岸の広いハイウェイをぶつとばし、間もなくクラブの入口で止まった。今夜はクラブの六十一周年とかで、リオ・ジャズ・オーケストラと一緒にショウに出演するので、「ノイテ・デ・ジャズ(ジャズの夕べ) サンパウロ・デキシーランド・バンド特別出演」とポスターがあちこちに帖ってあった。先に来て居たクリネットのジルとピアノリストのシデイが、「演奏が始まる前にシャワーを浴びたら如何だ?」。と言って、今夜僕等が泊る事になっているキャビンに案内してくれた。

その夜のフェスタは海岸の波打ちぎわに面した広いサロンで、プールの上の特設ステージで、本物のボン・デ・アスーカル(シュガー・ルーフ)の巨岩のシルウェットをバックに、リオ・ジャズ・オーケストラがグレンミラーのムーンライト・セレナーデを演奏していた。ランチャや対岸の灯が

ゆらゆらと海面に映り、音楽の合い間には静かに打ち寄せる波の音が聞え、まるでハリウッドの映画のシーンの様にロマンティックな夜であった。

そこいらの食卓には小麦色の肌をした若いカリオカの娘が一杯で、サンパウロからやって来た僕等を好奇心に溢れた目で見ては何かそこそ話し合っていた。ブラジルでは僕等のバンドは何処のフェスタに出演しても、何時も招待客と同等に扱われ、しかも出演料はちゃんともらうので、特に御馳走の多い時は役得だと思っている。ガルソン(ボーイ)がキャピアのオードウブルに引き続き「いせえび」のサラダを運んで来た。サンパウロから車で先に来ていたデッシモとペドロ以外は、皆金曜日の午後仕事を終えてから、リオ・サンパウロ間のボンテ・アエレア(両空港から三十分おきに発着する)で嫁さんを家に置いていってやって来た連中なので、どうしても若いカリオカ達の方に目が行く。しかし、ペドロと口のうるさいデッシモの嫁さんが向いの食卓で目を光らせているので、御馳走には手を出しても、うかつな事は出来ない。特にイギリス人の二世のウイリーは、誰か



が演奏中にへまをやったりすると偉そうな口をきくのに、大の恐妻家で、心の中ではうじうじしているのに、嫁さんにつげ口されては大変と、かしまっている。

いよいよ僕等の出番である。“Charleston”<sup>チャールストン</sup>等賑やかな曲を演奏するとカリオカ達ははしゃぎで踊り出し、ラスト・ナンバーはリオ・ジャズ・オーケストラの連中迄ジャム・セッションに加わり、僕等のショウは大成功だった。続いて当夜のゲスト・シンガーのヘレン・メリルがリオ・ジャズ・オーケストラの伴奏で歌いだした。ダウンビート誌やエスクワイヤ、プレイボーイ等の雑誌の人氣投票で何度も上位に選ばれたというだけあって、ピリー・ホリデイを想わせる静かな歌い振りは何か人の心に訴える様なものがあつた。ところが何ていう事だろう。二・三曲目に入つた頃から、カリオカ達の話し声がガヤガヤと段々人耳をばばからなくなり、スローテンポの曲ばかりなの



で誰も踊らうともしない。そして四・五曲目になると、人々のお喋り<sup>しゃべり</sup>で歌手の声等殆んど聞きとれない位になってしまった。可哀<sup>かわい</sup>そうに北米からわざわざ当夜の為にやって来たヘレン・メリルは、プログラムの途中でステージを下りてしまった。側で見るとアメリカ人にしては小柄で、もう中年を少し越した年恰好<sup>しめころちう</sup>の彼女に、「貴女の歌い方はピリー・ホリデイそっくりで、ワンダフルだった」と僕は英語で話しかけた。誰も相手にしてくれないのがっかりしていた彼女は、急ににっこりほほ笑んで、「サンキュー、失礼デスガ貴方ハ日本人ジャナイデスカ？」と流暢な日本語で話しかけて来た。「私ハ長イ間東京ニ住ンデ居テ、赤坂等ノ、ナイト・クラブニ出演シテ居マシタ。日本人ハ皆礼儀正シイケレド、ブラジル人ワ皆馬鹿ネ、ダツテ静カナ良イ音楽ガ解ラナインデスモノ」と憤慨<sup>ふんがい</sup>しながらおち開けた。知らん間に近寄つて来たウイリーとフェルナンドが好奇心に溢れた目で彼女に英語で話しかけると冷たくあしらわれ、「これは一体如何した事だマサヲ？」と尋ねた。

その時、突然太鼓<sup>たいこ</sup>が烈しいサンバのリズムを打ち始め、カルナヴァルの衣裳をつけたエスコラ・デ・サンバの黒人の一団が踊りながらサロンに入ってきた。フィオ・デンタル(歯を掃除するのに用いる糸)と言う<sup>おきな</sup>細いフンドシをつけ、均整<sup>きんせい</sup>のとれたお尻を振りまわして踊るムラッタを見ると、もう我慢出来なくなつたかの様に、白人も、黒人も、金持ちも狂気の様に熱狂して一斉に踊り出した。

# 音

楽夜話〈38〉

## 「兵庫の音楽史」

### を語る

八木 真平 〈音楽教育家〉



【兵庫音楽の父・奥山朝恭】

人は皆自分は物おぼえがよく、なんでも知っていると自負しているのではなからうか。ところが人間はだれも心のどこかに空洞があって物わすれをするものだ。殊に年を取るにしたがって物わすれは激しい。自分の通ってきた人生街道ですら二十年、三十年すぎると、どこを通ったのか思い出せないものである。それ故すべて物の記録が重要になってくる。私は兵庫県に移り住んではや五十年、その間ただ一途に音楽教育と社会教育にあたってきたのである。現在本県の音楽人口は大変多く、一般に音楽的レベルが高い。しかし、最初から高かったわけでは

なく、やはり未開の時代もあった。現在のようない進歩した楽界が生れるまでに携わった、過去の熱心な音楽家たちの知られざる努力のあとを、音楽の歴史として今書き残して置かねばならないと、最近強く感じるようになった。

この仕事を始めるについて、先ず資料を集めることから手がけた。既に故人となられた先輩の家を訪ね、あるいは多くの楽友を訪ねて、さまざまな資料をお借りする一方、私の手もとに長く保存しているすべての材料を掘り出して、おもむろに執筆にかかった。

最初に洋楽がわが国に入ってきたルートにふれ、続いて明治中期以降に兵庫の音楽教育を開拓した人々について記録を綴った。そのうちから一、二取り出して見よう。一番最初兵庫の音楽教育に取り組んだ人は奥山朝恭である。この人は明治二十年（一八八七年）兵庫尋常師範学校の初代音楽科教員として着任した。この頃の兵庫の音楽教育は大変立ちおくれしていたので、これを取りもどそうと必死の努力をこころみた。

ここに一つおもしろい話がある。この時代の文部大臣森有礼がたまたま兵庫尋常師範学校の視察にやってきた。彼はもちろん奥山の音楽授業をも視察した。ところが当時学校にはまだ楽器は一つもなく、奥山が私物の胡



神戸新聞出版センター・のじきく文庫発行「兵庫の音楽史」を執筆した八木真平氏





昭和天皇湊川神社臨幸御親拝（昭和4年）



湊川神社

弓を使って音楽授業をやっていた。これを見た大臣は校長に向ってオルガンはないのかと尋ねた。校長はありませんと答えたところ、大臣はすぐオルガンを買ってやれと命じた。これは全く鶴の一声で直ちにオルガンが購入されたということである。しかし、その時の生徒に取っては、オルガンは異様な存在であったそうである。

奥山朝恭についての記録は多いが、その中からもう一つ披露して置こう。奥山が着任した頃の兵庫尋常師範学校では、南北朝時代の忠臣楠木正成が戦死した五月二十五日を忍んで、毎月二十五日に職員生徒全員で湊川神社に参拝することになっていた。奥山もこの行事に参加するうちに、参拝の時社前で楠公顕彰の歌をうたわせたいと考えた。彼はさっそく東京の友人で、文学者の落合直文にこの作詩を依頼した。やがて作成された「湊川」という歌詞に奥山自ら作曲した。これは四編、十五節からできた長いものである。その第一節は次の通りである。

一、青葉繁れる桜井の

里のわたりの夕まぐれ

木の下蔭に駒とめて

世の行く末をつくづくと

忍ぶ鎧の袖の上に

散るは涙かはた露か

この曲は職員生徒に大変な感激を与え、生徒の中には泣きながら歌うものもあった。これは全校参拝の時必ず社前で合唱した。その後小型楽譜で出版したところ、各地から注文が殺到し、遂に日本中この曲を知らない人はいない程愛唱された。これは「兵庫の音楽史」の割合はじめに表われるエピソードである。

以上乞われるままに「兵庫の音楽史」出版について若干の考えを書いたが、私もはや八十六才の正月を迎えた。しかし、三十年前に種を播いた神戸市母親コーラス協議会が現在七十五チームを擁する大世帯に発展しているので、この集いと一緒に活動したいと思っている。





珈琲のみながら…

「三味線お千代」神戸公演中の

# 山村 聡さんに聞く 僕のパワーを創った 一中時代の早朝登山

だ空気を少しずつ抜くんですよ、お陰さまで二十六日から復帰しました。

——生田神社で偶然お会いしましたね。

山村 フアンの方にいただいたお守りを納めに行っただけいかなり「お体いかがですか」といわれて神殿の奥へ案内されて、権禰宜さんがお抜いしてくださったんです。ところがそこにお薄の茶碗がいくつかあって中の一つ、馬鹿に気に入ってしまってますね。南汎さんの作だと聞きました、どういう方ですか？

——南汎さんは舞子焼を復興された方です。陶器がお好きなんです。

山村 今は新しいものが好きで茶碗がいつの間にか集まってしまっただけ、たまにお茶をたてたりしますが。

——ところで神戸一中のご出身とお聞きしましたが。

山村 親父の仕事の関係で転校して、小学校は諏訪山にちよっと居たんです。神戸一中の時代、父は兵庫県庁に勤めてました。古賀といまして佐賀の葉隠の出身です。神戸では今も、早朝登山をやってますか？

——やっています。これは神戸の名物ですから。

神戸一中出身の俳優山村聡さん（78才）が、昨年（2007年）の二月三日～六日の間、神戸国際会館で上演された商業演劇「三味線お千代」に出演。東京公演の千秋楽に、舞台で骨折、入院し、新聞報道などで心配されたが無事退院。神戸では、主演の山田五十鈴さんと若々しい競演ぶり。さっそく楽屋を訪ねて神戸時代のお話を伺った。

——先日、山村さんのお言葉をテレビでたまたま聞きまして感激しました。お怪我のことについて「恥ずかしいことだ」とおっしゃって……。

山村 皆さんに顔向けできない気持ちですからね。十一月十五日、最後の幕の早変わりして出る暗転の間に骨折をやってしまっただけ、ひどく折れたのが肺に刺さって肺が潤んで息ができないんです。科白をはしょってでも、と舞台に出て、どうしてできたのか分らない、大声出してやっただけ、息ができないので草笛光子さんや山田五十鈴さんはびっくりしたらいいですね。後で肺が潰れていますよといわれて、これは終いかなと思っただけ。

——ほんとうに怖いんですね。

山村 医学は凄いな。背中に穴をあけて胸腔に入り込ん

山村 その頃、大倉山の傍に住んでまして、中学の五年間毎朝再度山に登ってました。大倉山側から山道を二十九丁、殆ど走る調子で行き、帰りは疾走ですよ。奥の院から修法ヶ原があり、大竜寺の前に茶店があった。早朝登山の人たちはトースト一枚位と牛乳を飲んで二台あったピンポン台で順番にやっつてから帰るんです。

——それが俳優としての身体の土台を作ったのではないですか。今は六甲全山縦走というのがあるんですよ。

山村 我々の頃は布引から摩耶に出て、上がった下りたりするトウエンテイクロスの側の八州嶺ダムでよくキャンプした。それから六甲から有馬に出て有馬道から住吉道を下りるのを、時には親父と一しよでしたが、一人でしよつ中歩いてね。一中では日曜日の遠足会、年に一回有馬越えの団体競走があった。五年生が隊長で、朝八時に布引の古い校舎から有馬、住吉、摩耶越えの三つのコースで到着は有馬神社で十二時にテントを張る。僕は下りに強くて走りっぱなしだからいつも隊の先着でした。神戸一中時代が一番楽しいことでした。

そんな風で遊んでばかり、五年の正月七草すぎから一念発起、一高受験の勉強をするので三学期を休みたいと先生に申し出たら怒られました(笑)。ところが良い先生で「病気だとの診断書を持ってくれば俺は知らんよ」——(爆笑)

山村 朝登山のあと家の掃除などをしてから、大倉山の図書館で夜の九時まで、一番薄くて大事なことだけ書いてある参考書を買ってきて一日のノルマを三回ずつやる。これはうまく行きました。終るとまた再度山に登るんです。若いねえ、やっばり！これをずーっと通したよ。

——凄いや。パワーですな。

山村 良い成績で入ったよ(笑)



山村さんと百合子夫人

それが帝大に入った頃芝居の本に魅せられてね。とうとう「太陽座」という新劇の文芸部に入れてもらって、人手不足でいつのまにか殆ど主役。ところが家では絶対反対。昔は立身出世主義で、祖父が維新の時に品川県知事を拜命しているのですね、それを裏切ったんですから。——兵庫県の知事さんは佐賀の方ですよ。前の坂井知事も今の貝原知事も。

山村 芝居では食えない時代でね。運の良いことに全く知らない外堀の関西新派から二枚目として来ないかと話があって、帝大高文出で月給七十五円ぐらいの時に百円と汽車賃、宿泊代もくれたので好きな道にすっ飛んで行っちゃったんです。(笑)

——まあ、そうだったんですか。

山村 神戸はバタクさい文化の都市ですから、すてきな音楽はあったけど新派とかあまりやらなかった。新派じゃないが井上正夫演劇にいた時、新開地の湊川あたりの劇場に来ましたよ。

——松竹劇場だと思いますが。

山村 それでまた音楽もとても好きでした。

——音楽はどんなものをお好きなんですか？

山村 クラシックとポピュラーもね。クラシックでは長い間ブラームスが流れて好きだと思ってたんですが、しばらく前からやはりモーツアルトね。ブラームスやベートーベンは落着いて聞かないといけないが、イーザリスニングですよ。しかもきれいで奥が深くてね。

——神戸の人は、モーツアルトを好きな人が多いですよ。

山村 僕は神戸という街を、モーツアルトのような街だと思っていますよ。

——これからのお仕事のご予定は？

山村 テレビ朝日系で三月放映予定ですが城山三郎原作で「毎日が日曜日」という四時間ものです。





珈琲のみながら…

親子ふれあいミュージカル

胎児に対する親の責任について

神戸公演を前にした演劇集団〈目覚時計〉代表

稲垣美穂子さんに聞く  
子どもたちに  
もっと心をかけて

「胎児に対する親の責任について」の神戸公演を前にした稲垣美穂子さんに、ユニークな胎教ミュージカルに込められた思いを聞かせていただいた。自ら「目覚時計」となって十三年、「親子ふれあいミュージカル」で鳴らし続け、送り続けるメッセージは何？稲垣さんのエネルギーの源泉はどこに？

★日本人よ、子どもたちに心をかけなさいでないと日本は滅びるよ！

「日本の皆さん——日本人は子どもたちのためにもっと心と時間をかけなさい、でないと日本は滅びるよ。今の日本の子どもたちを見てると十年後、二十年後の日本はこわくない——とある外国人に言われました。皆さんはどう思いますか。私にはそんな風には見えないのだけれど、そんな大変な時が来ないように、子どもたちにもっと心をかけましょう。目を覚ましてください！」こんな気持ちで、日本の子どもたちを何とかしなくてはとの思いに駆られて、私は役者ですから芝居という方法を選びました。子どもと両親の家庭の輪を世の中の基本とし

てふれあいミュージカルで交流してきて、お腹の中の赤ちゃんを忘れていたことに気がついたのは四年前のことです。

その頃井深大さんとお会いする機会があり

「胎児を主題にしたミュージカルを考えているのです」と申し上げますと

「あらゆるジャンルで0歳からの教育を試みてきたけれど、演劇という色や形、音楽、言葉とあらゆる要素を持ったものの力を忘れていた。ぜひ、やってください」と原案を下さいました。

それから完成まで三年。脚本の松木ひろしさんは何度書き直し、とうとう毎日の催促。次に音楽ができ、振りが付き芝居と合わせて……となかなか難産でした。

★できたての心臓の光に射抜かれた大塚さん

劇団練習場近くの杉山四郎先生の病院で胎児の勉強をさせていただいた時のこと。臨月の胎内がテレビに写し出されて、思いがけず大きな赤ちゃんの心臓がギューウッ！と収縮するんです。びっくりするような力強さでま



た、ギューウツノと。ショックを受けているところへ、次にまだ妊婦とは見えない胎内の何も写っていない薄暗い画面を見つめていたら、突然、チカッ、チカッと小さな輝くものがあるんです。何だろうと見ているとまた、チカッ、チカッチカッノと。射るように!!

「わかりますかノできたての心臓ですよ」と杉山先生。発光しているのしか思えない凄くエネルギーを持った生命の中心をまのあたりに見て、産科医の役の大塚國夫さんは失神してしまっただんです。もう、すっかり驚いて感動させられましたね。

胎児は胎内で両親の心の状態や家族のようすを感じてのびのびしたり不安に固くなったりするそうです。『ふれあいミュージカル』の公演で大人より子ども、年令が小さい方がメッセージをしっかりと受け止めてくれることに驚いていましたので、真っ白な吸取紙のような感受性を持った胎児のために、良い環境を作ってやっってください、と訴えずにはいられません。胎児を通してのちというもののすばらしさ、神秘、尊敬をあらためて感じていただきたい、というのが「胎児に対する親の責任について」のテーマです。

### ★熟年離婚も元の鞘に納まる胎児の力ノ

公演の初日が終って嬉しい反応がありました。幼児とお母さんは主題歌の「赤ちゃんはダイヤモンド」を歌いながら帰るんです。中学・高校生の気難しい年頃の子どもたちが「私の生まれた時はどんな風だったか教えてノ生んでくれてほんとうにありがとう」と心の通う会話ができたに聞きました。

また、あるOLのグループは結婚への憧れを感じたのか、帰

りに寄ったスナックで肩を組んで「赤ちゃんはダイヤモンド」と歌い、看護婦さんは仕事に誇りを感じて喜んでくれました。「お陰さまで無事出産しました」と突然の電話。実は熟年離婚寸前で別居中のご夫婦が、娘さんの妊娠の経過が思わしくない原因が自分達にあると気付いて元の鞘に納まり、無事初孫が誕生したということでした。また友人の旦那さまは奥さまの代りに見て帰られ「何かしなくちゃいけない、という芝居だったよ」とやたら張り切っておられたとか。

子どもの心を育てる機構や建物のハード面は役所などが準備していると思いますが、ソフト面の一つとしてこの公演は、生きて呼吸し、そこで出会って人の心に向かひが生まれるできたてのものの現場で、心を育てる仕事の先駆けのようなものかな、と思ったりします。

### ★神戸と結ばれた、たくさんの赤い糸

神戸の街は磯の香が漂ってくるすぐ側で、おいしい文化の粋のお料理がいただけますし、とても良い街。お店が個性的で小径を歩き回るのが面白かったです。ピルが増えて、そういう楽しみが少なくなると残念ですね。「神戸っ子」とは田辺聖子先生の「カモカ連」に二度参加させていただいて一緒に阿波踊りを踊るなどという

楽しい縁がいろいろありました。

「胎児に対する親の責任について」は東京以外では神戸で初めて上演され、神戸と結ばれたたくさんの赤い糸に気付かされた。産婦人科医の林弘平先生がこのミュージカルをご覧くださったのがきっかけですが、自然に大きな輪が広がっているいろいろな分野と結びつき、理想的な姿になりました。とても嬉しく思っております。(談)

ミュージカル「胎児に対する親の責任について」

上演 演劇集団 八目堂時計

2月11日(土) 14時と18時

新神戸オリエンタル劇場(078)二九一—二〇〇

神戸っ子編集室でもチケットを取扱っています。

左から林弘平さん、神戸・チャリティ公演実行委員会の  
叶健治さん、稲垣美穂子さん

